

繁殖管理の確認

今年は急な気温上昇や湿度が高い夏となり、暑熱ストレスのため繁殖管理や生乳生産に影響が出た農場もあるかと思えます。

暑熱ストレスの影響が減り涼しくなった秋になって、発情兆候を再発させる牛が増えてくるのが近年の傾向です。

この時期の繁殖管理は来年の計画的な生乳生産に大きな影響を与えます。今後に向けて管理方法を確認しましょう。

一、発情の見え方を高める

乳牛の高泌乳化とともに発情兆候の微弱化、発情持続時間の短縮など、発情発見率の向上は難しい課題の一つです。

① 観察の回数と時間で高まる

発情発見率は観察回数や観察に掛ける時間を増加させることで高くなると言われています(表1)。

② 要注意牛の抽出

前回の発情兆候や陰部から排血した日から追跡し、今日、重点的に観察する要注意牛を抽出します。その際、カレンダーやホワイトボードなどを用いて農場内の複数の目で要注意牛の情報を

表1 発情発見率に及ぼす観察回数の影響

| 観察時間帯 | 観察回数 | 発情発見率 (%) |
|---------|------|-----------|
| 早朝・昼・夕方 | 3回 | 86 |
| 早朝・夕方 | 2回 | 81 |
| 早朝のみ | 1回 | 50 |
| 夕方のみ | 1回 | 42 |
| 昼のみ | 1回 | 24 |

(Beerwinkle)

※観察時間は1回30分

共有して観察することでも発情発見の向上が期待されます。

③ 発情発見補助具の活用

飼養管理体系や規模により使いにくい農場もありますが、テイルペイントやヒートマウントデバイス、テクターなどの補助具も活用できます(図1)。



図1 テイルペイント(上)とヒートマウントデバイス(下)

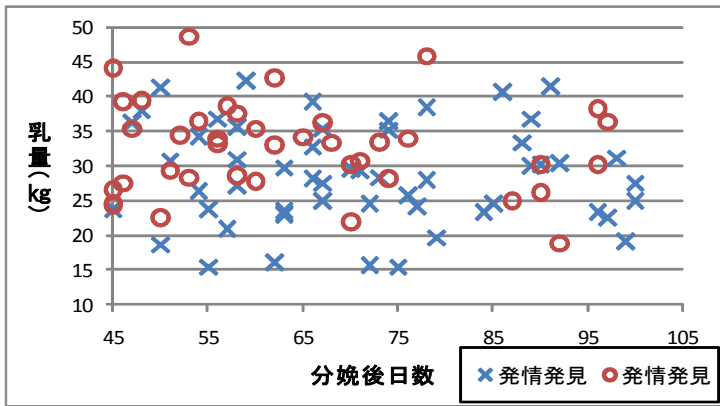


図2 発情発見の有無と分娩後日数と乳量の事例 (A牧場、普及センター調べ)

一、受胎率の向上のために

一般に牛が泌乳ピークとなり乳量が増大になる時期と授精開始時期は重なるものです。この時期は産乳に摂取した栄養が使われるため、体脂肪の蓄積(BCSの回復)や卵胞の発育、発情兆候の発現などにまで栄養が回りづらい時期です。

その一方で図2は、分娩後45日から21日毎に発情兆候を発見できなかったかできないかをチェックしてもいい、その期間に最も近い乳検検

定日乳量と分娩後日数の関係をグラフにしたものです。A牧場では、日乳量が高めの牛で発情兆候を発見できない牛もいますが、注目すべきは日乳量が25kg以下の低めの乳量に発情兆候が発見できない牛の多いことです。そして、これらの牛は分娩後当初からエサの食いつきが良くなかったり、今ひとつ活気のない牛たちでした。

要注意な牛は

- ・乾乳期に過肥になっている牛
- ・分娩後、急にやせた牛
- ・分娩後、採食量があがらない牛
- ・分娩前後に病気になる牛

このような状況の牛から、特に乾乳期から分娩後泌乳初期の管理が重要であることがうかがえます。飼養管理の面からも牛の状態をよく観察し、繁殖管理の改善に結びつけたいものです。

乾乳期から分娩後泌乳初期に

- ・過密飼育になって食い負けしていないか。
- ・採食行動や寝起きがしづらいい施設になっていないか。
- ・新鮮なエサ(粗飼料)、清潔な水が十分にあたっているか。
- ・飼槽・水槽にいくのをためらったりしないか(肢蹄に問題がないか)。
- ・舎内の換気が十分でストレスのない環境か。